褐色の姫君

山手 夏央香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

褐色の姫君

【Ｎコード】

Ｎ７３５０Ｕ

【作者名】

山手　夏央香

【あらすじ】

黄金の砂漠に囲まれた国ハデル。その国王の妹姫シラは自由気ままな生活を送っていた。なのに突然沸いた遠方の国ジーナの第１王子ラースとの婚約話がシラとハデルの民を巻き込んだ大騒動に広がっていく…。

第1話

黄金の砂が風に舞い上がる。辺り一面には広がる金色の砂漠。前には金色の水平線がどこまでもつづき、その果てのない景色に感嘆の溜息を漏らさぬ者はなく、澄んだ青い空に輝く強い太陽からの光線にげんなりとした溜息を漏らさぬ者もまたいない。限りなく美しい景色は体験してみればまた違った溜息を生むのだと、従者を後ろに大勢付き従えた少年は酷く不満げな顔をする。その姿を真横で盗み見ている同じ年頃の少年は深々と溜息をついていた。

砂漠の王国と呼ばれるこの国、ハデルは通り名どおり、周囲を砂漠に囲まれた小さな国である。古くから貿易を中心として栄えたハデルは小さいながらも裕福な国として有名である。特産品として最も有名なのが、この国独自の植物、ナリタリカと呼ばれる花から作られる香辛料と染め物である。ナリタリカから作られる香辛料は料理に加えれば食欲をそそる匂いと味が口一杯に広がり、一度食べたら忘れられないと評判である。そして染め物はナリタリカの花のようにうっすらと発光し、キラキラと輝く、深い海のような青色になる。ハデルを訪れる者は皆、ナリタリカから作られる二つの特産品の内どちらか、又はその両方を必ず買って帰って行く。

勿論ハデルの国民は例外なくナリタリカの恩恵を得て生活しているのだ。ハデルの料理には必ずと言っていい程ナリタリカの香辛料が入り、ハデルの民は皆、ナリタリカで染めた服を身につけている。日に焼けた褐色の肌にその深い青はよく似合う。そして国民は商人が多く、明るく賑々しい街に一歩踏み込んだ者は砂漠とのギャップ

に面食らうと言われている。

そのハデルには若い王とその妹姫が君臨している。王は齢２８。妹姫に至ってはまだ１６歳である。そして何より妹姫は絶世の美女である、と噂は砂漠を越え、海を越え、隣の国を越えて砂漠を渡る少年の国、ジーナにまで至っていた。砂漠から一歩ハデルに踏み込んだ少年は他の者と同様賑やかな街の様子に思わず息を呑む。彼はジーナの第一王子である。名前をラース・タザラン。ジーナの王族タザラン家の由緒正しいお坊ちゃんである。そのお坊ちゃんが大勢のお供を引き連れてわざわざハデルにやって来たのはラースとハデルの妹姫との間に起こった婚約の話の為である。

「…すげぇな…」

ぽつりと呟くラースに小さな頃から一緒の側近タオは思わず溜息をつく。

「…分かってますか？感心するのも結構ですけど、何しに来たか忘れてないですよね？」

「分かってる分かってる。ハデルのお姫様との婚約を纏める為に来たんだろ？」

露店を物珍しそうに眺めてフラフラと歩きながらラースはタオを見向きもせずに答える。

「そうですよ。…名前は覚えてますね？」

ジロリとラースを睨むタオを気にせずラースは全く違う名前を口にしてみせる。

「サリー様とかなんとかだろ？」

「一文字も合ってないですよ。シラ様ですよ、シラ様。覚えて下さいね」

了解の意味を示したいのかラースは露店に視線を向けたままひらひらと手を振る。と、急に露店の前でしゃがみ込みラースは装飾品を手にとる。銀細工のブレスレットをタオに見せてにっこりと笑った。
「母上にどうだろう？」
ラースの母、ジーナの王妃ミナは他国にも名を轟かす程の美人である。透き通る真っ白な肌に輝く金の髪、整った顔の大きな瞳は空のように青く見る者を魅了して止まない。ラースの手にとったブレスレットは王妃によく似合いそうである。が、今は王妃の贈り物を選んでいる場合ではないのだ。
「…確かに似合うと思いますが…それを今見る必要はあるんですか？」
「…？」
きょとんと首を傾げるラースにタオはぴくりと眉を上げる。
「ハデルとの約束の時間まであと少ししかないんですよ！もう、よそ見ばっかりしてないで早く行きますよ！」
言うが早いかタオはラースからブレスレットを取り上げる。それを元に戻してラースの襟首を掴むと、そのままズルズルと主人を引きずって歩き出す。こんな事ができるのは幼い頃からの付き合いの賜物だと分かってはいるが、ラースの危機感のない様子にタオは溜息をつかずにはいられなかった。

ラース達がじゃれあいながら歩き出す一方、ハデルの王宮では若き王、レオザがドスドスと足音を響かせて広い王宮を歩き回っていた。彼が歩き回っている理由はただ一つ。たった一人の妹、シラを探しているからだ。
「レオザ様、こちらにはいらっしゃいません！」
「はぁ！？…あーいーつー…どこ行ったんだ！？」
わなわなと肩を震わせるレオザはくるりと声のした方を振り返る。

青い顔の衛兵を見て、レオザは溜息をつく。まだ２０そこそこの若者はつい最近衛兵になったばかりだ。シラをしっかりと見張る事ができないからと叱責するのも気が引け、溜息と共に再び顔を上げたレオザは途端に唖然とした顔をする。衛兵の後方５メートル程先の窓から出ようとする一人の少女の姿が見える。
しなやかな体躯、褐色の肌に金色の髪が眩しく光る彼女は視線に気づいたのかくるりと振り返る。
「…バイバイ」
彼女はにっこりと笑いひらひらと手を振る。
「お前…何してる！？ふざけんなよ！」
「ふざけてる訳じゃないって。じゃーね、お兄様」
言うが早いかレオザの妹、シラは窓から乗り出していた身体を勢いよく宙に浮かべる。その後は重力に従い一直線に地面へと進んでいく。シラの身につけているナリタリカの青い服と短い金の髪がふわりと風に揺れていく。シラの褐色の長い手足は伸びた状態から徐々に屈折し柔らかく緑の大地に着地する。心地好い風に肌を撫でられシラは満足げににっこりと笑い、自身が先程までいた窓辺を振り仰ぐ。呆れて頭を抱える兄と口をあんぐりと開けたまま声もあげられない衛兵にシラはひらひらと手を振る。
「ジーナの王子とやらによろしく」
よく通るハスキーボイスが風に乗り、シラは心残りは何もないといった様子で颯爽と歩き始めた。

第2話

ハデルという国は砂漠の真ん中に位置する国である。国の人口はそれ程多くないが、常に旅芸人や商人達が行き交うため、街に人は多い。
王都はグロソップ、皇女シラの住家つまり王宮が街の中心にでん、と居を構えている。その王宮から歩いて３０分もすればこの国一番の繁華街にたどり着く。
そして先程王宮から抜け出したシラは繁華街の中を颯爽と闊歩していた。賑やかな街中はシラは勿論、旅人達や国民、来る人全てを楽しくさせるようだと常々シラは感じている。身内贔屓と言えばそれまでだが、全くの的外れでもないだろうと思わせる喧騒がある。砂漠特有の橙の地面、頬を撫でる少し熱気を孕んだ強い風、その風に煽られて進む白い雲と水を流したような青い空。色鮮やかなこの国をシラは心底気に入っている。
それはもう、何処かに嫁ぐ気にはなれない程に。

「…やってらんないなぁ…」

小さく呟いた声は風に溶ける。一つ溜息をついたシラは目当ての店を見つけ、足早に中に入っていった。

その店は古汚いような店内で、照明は薄暗く橙の明かりが中を照らしている。入口から階段を下り、降り立つ店内にはカウンターと三つの長方形のテーブルが置かれている。照明からの影か、それともただの汚れか、判断のつかない古ぼけた木のテーブルには全て灰皿とナリタリカのスパイスが据え付けられている。

シラがこの店に入ってきたのはまだ日も明るい内だというのに、そこには１４人の男達が居座っている。真昼間から酒を飲み、煙草に火を燈す彼らはシラを見て安心したように息をつき、笑いかけた。
「…遅いぞ、シラ」
「また出掛けるに手間どったんだろう」
「今日も逃亡したのかよ？」
口々に話し掛けられ、シラは笑いながらカウンターの中央の席に座る。
「まぁね。いつもの通りだよ」
カウンターに腰を掛けると同時に飲み物が出される。シラがいつも頼む炭酸水で割ったアルコールである。
当然のようにそれを口に含み、シラはゴクリと喉を鳴らした。
「それでどうなの？順調？」
冷えたグラスを頬に当て、その冷たさに満足しながらシラは真横に座る男に話しかけた。
男はナバタという名前で、年齢は２５歳、背が高く、整った端正な顔をしている。しかし明るく陽気な他の男達と違い、一人落ち着いていてどこか冷たい感じのする男でもある。
ナバタはシラに視線を移し、まじまじとシラを眺めた。
「…まぁな。こっちの準備は上々だ。後はタイミングだけだろう」
「それはよかった。けどまだダメよ」
にっこりとシラは笑う。ナバタを上目遣いに見つめてシラはくるりと椅子を回転させ、そこにいる一同を見渡した。
「私達の明日に！乾杯！」
持っていたグラスを掲げ、男達の歓声を聞きながらシラはグラスの中身を空けた。

ハデルの王宮に着いたラース率いるジーナの一行は王宮の中、応接

室でレオザとの謁見を迎えていた。初めて見るハデルの王をラースは不躾な程まじまじと見つめた。
青い瞳、黒い髪、甘いマスクの美男子ではあるが、ラースを驚かせたのはそこではなく、肌の色である。
「…白い…」
思わず呟けばレオザはフッと鼻で笑う。
「お前もな」
「…この国では珍しいですよね」
「まぁな。来るまでに見られたろ？」
褐色の肌が中心に行き交う中でラース達のように肌の白い人物は人の目を引く。服を着て肌の色が隠れても何処かが違う。ちょうど今のラースのようにじろじろと見つめる者ばかりだった。ラースはレオザを見つめて素直に頷く。
「そうですね。まぁ、見られましたけど、慣れてますから」
にっこりと笑うラースをレオザは値踏みでもするように眺める。将来自分の弟になるかもしれない少年はレオザを見て楽しそうに笑う。実際王族に生まれたからには見られる事は当然なのだ。その一挙手一投足を国民だけでなく他国も注目している。生まれた時から人々の視線を集め、それは死ぬその時まで続く。否、もしかしたら死んだ後まで続くのかもしれない。王族とは、それ程の注目を集めるのだ。そしてそれは好意的なものだけではない。中には敵意もある。好意的な視線と敵意ある視線に射ぬかれながら決して屈する事のない人物、それが王でなくてはならない。少なくともレオザはそう考えているし、今目の前にいる王子もその事は理解できているように思える。
「それはそうと、シラ様はどちらに？」
にこりとラースは笑う。当然といえばその通りの質問にレオザはピクリと眉を跳ね上げる。牽制でもするようにラースを見遣るが、ラースは飄々と視線を受け流す。質問の答えを待っているラースにレオザは深い溜息をつき、片手で額を抑えた。

「…いない。会うのは明日にしてくれると助かるんだがな」
「いない、とは？」
「言葉通りだ。今はいない、ついでにいつ帰ってくるかもわからない」
深い溜息と共に言えば、ラースは目をしばたたき、次いで興味深そうに顎に手を沿える。
「成る程。シラ様は特にこの婚約に乗り気ではないということですね」
先程までの態度を変えずラースは相変わらず飄々と笑顔を見せる。
その様子を呆れたように眺めてレオザは頷いた。
それを確認してラースも頷いてみせる。
「明日、会えるのを楽しみにしています」
いつまでも笑顔を崩さないラースをレオザは一抹の不安と大きな興味を持って見つめていた。

第3話

白い三日月が薄く砂漠を照らしている。昼間よりもぐっと下がる気温にラースは顔をしかめて案内された部屋で控えているタオに視線を向けた。タオはいそいそと持ってきた荷物を部屋に配置していたのに、ラースの視線に気づいたのか顔を上げてきょとんと首を傾げてみせる。意外に素直な反応に何と無く憎らしくなって、ラースは手に持っていた本をタオに向けて投げつけた。タオは小さく声を上げる一方で、上手く本をキャッチする。それから嫌そうにラースを見つめ、深い溜息をついた。

「なんです？言いたい事があるなら口で言って下さいね」

言ってすぐにまた荷物を取り出すタオを眺めてラースは座っていた窓辺から立ち上がり、タオの前にしゃがみ込んだ。

「…なんで、俺が待たされてる？」

「なんでって…シラ様がまだ帰って来ないからじゃないですか？」

「だから、おかしいだろ！？俺、客だよな？普通待たされないだろ！？」

バンバンと床を叩くラースをタオは呆れた表情で見遣る。

確かにラースの言う通り、ジーナでは客人を待たせる等有り得ない話だ。しかしここはジーナではなくハデルである。国も違えば常識も違う。ハデルでは客人を待たせる事は当たり前なのかもしれないのだ。

ただ、ラースは生まれながらのお坊ちゃまである。待たされる経験など今までないだろうから余計に腹立たしいのだとタオは一人納得する。

「…待ち遠しいんですか？」

「…なんでそうなるんだよ…」

がっくりとラースは肩を落とす。その様子を横目で眺めてタオは苦笑する。

「待たされて怒るのは相手を待ってるからですよ」
言われてラースはむっと押し黙る。考え込むようにしばらく口を閉ざし、唐突に指をパチリと鳴らした。
「何か思いつきましたか？」
タオを見てラースは勝ち誇ったように笑う。
「俺は自分の常識が通じないことに苛立ってる」
自信満々に言うラースを見つめてタオは溜息をつく。ラースの言う常識とは客を待たせないという事だ。なのに今は待たされて苛立っているのだから、要するにシラを待っているのと同じではないのかとタオは呆れたようにラースを眺めた。
「まぁ何でもいいですけど。明日に備えて寝ましょうか」
ぽん、と整理していた荷物を叩いてタオは立ち上がる。彼に割り当てられた隣の部屋へ向かおうとするタオの腕をラースが急に後ろに引いた。
「…誰かいる」
小さく囁くとラースは先程まで座っていた窓へと視線を向ける。忍び寄るように足音を立てずに近寄るラースを今度はタオが腕を引いて止めた。立ち止まるラースの前に出てタオは窓の外を注意深く見つめた。
漆黒の闇のなかに満点の星と白い月が浮かび上がって見える。薄明かりに照らされた砂漠は金色ではなく黒くなっている。窺うように窓から身を乗り出したタオは上の窓から下を見つめている二つの目を見つけた。
「…どなた？」
少女の声で聞かれてタオは一瞬肩を震わせた。
「その部屋…ジーナからの王子が泊まってるって言ってたわ。あなた、王子様？」
「…違います。あの、あなたは？」
「私はキャロルよ」
答えると同時にキャロルはふわりと窓から飛び上がる。

「うわ」
受け止めようと腕を伸ばすタオをちらりと見、キャロルは慣れた様子で窓からタオの横に降り立った。次いでタオを見て小ばかにするようにふっと笑った。
「…あら、もう一人いるのね」
タオから視線を移し、キャロルは部屋にいるラースを見てにこりと微笑んだ。
「初めまして。可愛いお嬢さん」
12歳程のキャロルと目線を合わせるようにラースはしゃがみ込む。その様子を見てキャロルは呆れたように溜息をついた。
「子供扱いしないで」
むっとするキャロルに目をしばたたいてラースは苦笑した。
「これは失礼。…お名前を伺っても？」
「キャロルよ。あなたが王子様？」
「ジーナの第1王子ラースと申します」
きちんと頭を下げるラースをキャロルは満足げに見つめてにっこりと笑った。
「ラースね。…レオザとシラには会った？」
小首を傾げて上目遣いにキャロルは尋ねる。キャロルの長い髪がさらさらと白いネグリジェのような服にかかって揺れた。
「レオザ様にはお会いしましたが、シラ様とはまだですね」
ラースの言葉を聞いたキャロルは興味深そうにラースを見つめた。
「そう。会いたい？」
キャロルに聞かれてラースは困ったようににこりと笑った。
「まぁ…そうですね」
「会いたくないの？」
はっきりしない答えにキャロルはじっとラースを見つめる。
「そんな事もないですけど」
「ふぅん…」
くるりとキャロルは向きを変え、入口の扉に向かう。扉を開けずに

その場でキャロルはラースの方に向き直った。
まるで扉を開けてくれるのを待っているような様子にラースは目をしばたたく。動く様子のないキャロルを眺めてラースは苦笑しながら扉を開けた。
「…どうぞ、お嬢様」
ガチャリと音が鳴り、下を向いたラースはそこにいた筈のキャロルがいない事に目を見張る。代わりに向かいから聞こえた声にラースは視線を移した。
「…誰？」
オレンジに近いような金髪の少女にラースは目を瞬いた。

第４話

シラが城下街から王宮に戻ってきたのは夜も更けた頃だった。王宮の入口で番をしている二人の衛兵は帰ってきたシラを見て呆れたような顔をしてみせ、ついでにこれみよがしに大きな溜息までしてみせた。その様子に慣れているシラは彼らを横目で眺めて通り過ぎ、中に入ってからくるりと衛兵達に振り返る。入口を示してにこりとシラは笑った。

「誰も来ない入口を守るより楽しいでしょ？」

全く反省の色のないシラに今度は本当に困ったように歳の多い方の衛兵が溜息をつく。

シラの無断外出は本当によくある事だが、最近はそれに加えて帰りの時間が遅い。昔は夕暮れと共に帰って来たのが今では辺りが暗くなった頃にしか帰って来なくなった。シラとしては１６歳の今、遊びたい盛りだろうとは周りも想像できるが、それでも一国の姫が夜更けに帰って来るのは頂けない。王宮で首を長くして待っている臣下達と王であり兄であるレオザが心配している様子を知らない筈はないのに、それでもシラは無断外出も夜更け帰りも止めようとしない。

だから王族としての自覚がない等と言われるのだと老いた衛兵はもう一度深い溜息をついた。

「…あんまり溜息つくと幸せが逃げるわよ」

何度も溜息をつく衛兵を心配そうに見つめシラは呆れたように言う。衛兵が小言を言い始めようとしたのを察知したのかひらひらと手を振って急いで踵を返した。

「じゃ、おやすみー」

ちらっと後ろを振り返って笑ってみせ、シラは宮殿の中へと進んで行った。

宮殿の中に入ったシラはそこで仁王立ちで待っている兄を見つけ小さく溜息をついた。無断外出と夜更け帰りに対しての言い訳等とうに通用しなくなっている。特に今日は他国であるジーナの王子が来る日で絶対に外出しないようにと前々から耳にタコができる程言われていた。当然王である兄の立場は最悪の状況だったろうと、元凶のシラでさえ不憫に思ってしまう。レオザの怒りは尤もで、反論の余地はないのだが、シラにはシラの意見と理由がある。身勝手で我が儘な理由だが、シラにとっては充分なものなのだ。

「…ただいま、お兄様」

にっこりとシラは微笑む。その姿を見つめてレオザは怒りの篭った声で口を開いた。

「言い訳があるなら聞いてやる」

「ないわよ。っていうか本当に聞く気あるの？」

腰に手を当ててシラは不満げにレオザを見上げる。

「謝罪の一言くらい言えよ」

「謝罪なんてありえないでしょ？」

悪びれた様子もなく言い切り、シラは一歩レオザに近付く。

「お説教は後で聞くから。先にお風呂入りたいんだけど」

くんくんと体の匂いを嗅いでシラは歩き出す。レオザの眉がぴくりと引き攣るのをちらりと見遣り、煽るようにこっと笑ってみせる。

「私にも考えがあってやってるんだから邪魔しないでよね」

べーっと舌を出してシラは駆け出す。レオザは一瞬鼻白み、次いで直ぐに大声を出す。

「シラ！」

怒りも顕に名前を呼ばれてもシラは振り返りもしない。慣れたもので無視したまま駆けていく。その後ろ姿を忿懣やるかたないといった表情で見つめ、レオザは遠く走り去る妹の将来を考え深い溜息をついていた。

レオザから逃げるように立ち去ったシラは部屋へ戻る途中でくるりと向きを変える。何となく明確な理由もないまま廊下を右に曲がりまた歩き出す。客人用の部屋が多く並ぶ通路の中、廊下の両端にある部屋の扉は順に花の名前がついている。シラの右手前から『スズラン』、『白ユリ』、『ミモザ』と、特に順番に意味はなく花の名前が続く。その中で1番大きい部屋が『ナリタリカ』である。ハデル特有の花の名前がついている処からもわかる通り、主に国にとって最も重要な客人が泊まる部屋である。その前を通り過ぎようとしたシラは突然『ナリタリカ』の部屋が開いて思わず声を上げた。

「…誰？」

部屋から顔を出す少年を目をしばたたいて見つめると、少年も驚いたようにシラを見つめ返してくる。お互いに様子を伺う中、口を開いたのは部屋の奥にいるもう一人の少年だった。

「…何してるんです？」

出てきた少年の様子を伺うように扉に近づき、そこで外にいるシラに気づき、『あっ』と声をあげた。

「これは失礼しました。シラ様では？」

「…そうだけど……もしかしてジーナの？」

今この客室を使うのならば、恐らくそうなのだろうと感じながらもシラは一応確認の意味を込めて尋ねる。嫌そうな罰の悪そうな顔をして二人の少年を交互に見つめた。

「ああ、そうです。こちらがジーナの第一王子、ラース・タザランです。私は彼のお付きで、タオ・リガーソンです」

先に顔を見たのが件の第一王子だと知り、シラはもう一度ラースをまじまじと眺めた。レオザの話ではシラより４つ年上の２０歳だということらしいが、ラースの見た目は２０歳よりも若く見える。シラと同じくらいと言っても別に怪しまれない風貌である。その点で

いくとタオの方が年相応に見え、シラは最初タオの方が王子なのかと思った。
「…今晩は」
じっとラースを見ているシラにラースはにこりと笑って挨拶をする。
「…どうも」
何故挨拶しているのか、また何故挨拶なのか、理由がよく解らず訝しげにシラはラースを見、戸惑った答を返す。と、笑顔を崩さずラースは更に口を開いた。
「ここへは何をしに？」
「はぁ？」
ラースの言葉から一種の嫌味を感じ取ってシラはぴくりと眉を跳ね上げる。シラが自分の家の中でどこに居ようとシラの勝手な筈だという考えの下、シラはむっとしながらラースを見遣る。
「別に私がどこで何をしようと関係ないんじゃないの？」
強い口調で問い返せばラースは笑顔のままシラをまじまじと眺めた。
「…ああ、それもそうですね。例えば他国の王子が来るのにすっぽかして何処かに行ってたって、それは個人の勝手ですよね」
はははは、と笑ってみせるラースをじっと見つめ、シラは腕を組んで踏ん反り返るような仕種をする。
「それ、嫌味のつもり？……いい機会だから言うけど、私、結婚なんてする気ないわよ？」
少しも譲歩する気はない様子でラースに向かって言い切り、シラはふん、と鼻を鳴らした。次いでもう一度ラースをきっ、と睨み部屋の扉が閉まる前に踵を返し、さっさと歩き始める。
その後ろ姿をイライラしながら一瞬見た後、ラースも怒りを込めて音を立てて扉を閉めていた。

第5話

賑やかな街の中で人々の視線がこちらを振り向いていく。驚きと好奇心の入り混じった何とも言い難い特有の視線。『何故』『どうして』と訝しみ、警戒しながらも様子を伺っているような普段と違う雰囲気にシラは一つ溜息をつく。不満を言っても仕方ないという諦めの溜息なのか、何故こんな視線に曝されているのかという怒りの篭った溜息なのか、はたまた別の溜息なのか、シラ自身判断はできなかった。しかし、何故この視線に曝されているのか、その理由だけははっきりしていた。

ちらりと後ろを振り向き、シラの後をついて来るジーナの王子とその付き人にシラは深い溜息をついていた。

ことの発端は朝食の席からだった。昨日深夜に帰ってきてラースと不本意な初対面をした後、部屋に戻ったシラが寝たのはもうしばらく我慢すれば空が明るくなるような時間だった。それでもいつもの事だとたっぷり睡眠を取っていたのが悪かった。お昼近くに食事をしようと部屋を出たシラがレオザから呼び出しを受け、向かった部屋には呼び出した張本人とその側近のバル、そしてジーナの二人がいた。

「…遅い。一体何をしていたのです？」

入口から顔を出した途端に兄の側近から文句を言われてシラは顔をしかめて見せる。幼なじみでもあるバルはじろりとシラを睨んでテーブルの一角を指差す。

「早くそこに座って下さい」
「もー、煩いなぁ。何なのよ？」
バルの性格を知っているシラは大人しくラースの横に位置された椅子に座り、バルを見遣った。
「私、お腹空いてるの。早く用件話して」
不服そうに背もたれに寄り掛かって足を組むシラを見つめてレオザが額を押さえて溜息をつく。
足を組んだ時にちらりと見えた太股にラースが視線を向けたのを知ってか知らずかシラは無防備に大きな欠伸をする。
「…お前、もうちょっと気にしろよ…」
「何を？それより用事を言って」
レオザを不満げに見上げシラは真横のラースに顔を向ける。
「ねぇ、なんでいるの？」
不満げな顔を崩さず尋ねるシラにラースも嫌そうに眉を潜めた。
「…昨日から思ってたけどさぁ、なんでそんな態度悪い訳？」
「それ、こっちの台詞。私初対面であんな嫌味言われたの初めてよ」
ぷい、とラースから顔を逸らし、シラはレオザに視線を移す。
「昨日夜に会ったから顔合わせはもう済んでるわよ」
言い切って席を立とうとするシラを眺めレオザはラースに視線を向けた。
「昨日は悪かったな。お詫びの代わりになるかわからんが、今日一日シラに城下街を案内してもらえ」
「はぁ！？」
突然の提案にシラは机を叩いて立ち上がり、真横のラースと向かいのレオザを見比べた。
「嫌よ！なんで私が案内するの！？」
「なんでもなにもお前の婚約者だろ」
「私が頼んだ訳じゃない！…っていうか、アンタも早く断ればいいでしょ！？」
キッとレオザとラースを交互に睨みシラは辛抱出来ずに歩き出そう

とする。その時急に誰かに手を取られてシラは驚いてくるりと振り返った。
「な、何！？」
シラの手を掴んだラースはにっこりと笑う。その笑顔に一瞬シラはぎょっとする。
「…せっかくだから案内してもらおうかな。よろしくシラ姫」
「はぁ！？」
反論する前にシラの手を掴んだままラースは立ち上がる。
「じゃ、お先に失礼します」
レオザは笑顔を崩さず片手を上げるラースを眺め、その一方でぎょっとした顔のままシラはその場に立ち尽くす。その手を強く引かれて一歩躓くように足を延ばしたシラはハッとしてラースに食ってかかる。
「ちょ…ちょっと！何なの！？離してよ！」
「嫌だよ。案内してくれないとわかんないじゃん」
「そんなの知らないわよ！私、案内なんかする気ないってば！」
ラースは留まる気はないのかシラの手を取ったまま扉に向かっていく。手を振りほどこうともがいていたシラはそれが出来ない事に腹を立て、助けを求めるようにレオザを振り返る。が、シラに見えたのは興味もなさそうに欠伸をするレオザの姿とラースとシラの引いたままの椅子を溜息をつきながら元に戻すバルの姿である。シラの視線に気付いたのかレオザはラースに声をかける。
「あぁ、夕飯前には帰って来いよ。一応宴会の予定だからな」
「わかりました。じゃあ夕飯まではシラ姫、お借りしますから」
ラースに向かって了解の意思を伝えるつもりなのかレオザはひらひらと手を振る。
「だから、私行かないってば！」
手を引かれたまま叫ぶシラを無視してラースは部屋を出ていく。それに続いて部屋を後にしたシラは不満を隠すことなくラースを睨み、ただその歩みが止まる様子がないことを認識し、心底嫌そうに諦め

の溜息をついていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7350u/

褐色の姫君

2011年10月1日12時45分発行